

## 聖書と「第四の水の相」

### 第1回 水と光から始まる生命の神秘

聖書の創世記の冒頭には、天地創造の驚くべき描写が記されています。

はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。神は「光あれ」と言われた。すると光があった。（創世記1章1～3節・口語訳）

この聖句を読むと、世界の始まりにおいて、「水」と「光」が特別な役割を果たしていたことが分かります。

天地創造の物語で最初に登場する物質的存在が「水」であり、最初に神が呼び出したエネルギーが「光」であるという順序は、偶然とは思えません。

一方、現代科学の一部では、水に関する新たな研究が進展を見せています。その代表的な例の一つが、アメリカ・ワシントン大学のジェラルド・ポラック博士が提唱した「第四の水の相」という概念です。

従来、水の状態は、固体（氷）、液体（水）、気体（水蒸気）の三相とされてきました。

しかしポラック博士は、これに加えてもう一つの相が存在すると主張しています。それが「排除帯水（Exclusion Zone Water、EZ水）」と呼ばれる特殊な状態の水です。

#### 1. 「第四の水の相」とは何か

ポラック博士の研究によると、水は特定の表面に接するとき、そして光（特に赤外線）を受けるときに、分子が秩序だったゲル状の構造を形成します。

このとき、水は通常の液体水とは異なる性質を示し、荷電分離が起こり、周囲の微粒子を「排除」するため、「排除帯水（Exclusion Zone Water、EZ水）」と呼ばれます。

さらに、この「第四の水の相」は、光のエネルギーを吸収することで拡大し、電気的エネルギーを蓄える能力を持つとも報告されています。つまり、光と水の相互作用が、秩序とエネルギーの場を生み出すというわけです。

この現象は、細胞内の環境とも深く関係している可能性があります。

私たちの体は60%以上が水で構成されていますが、細胞内の水は単なるバルク水ではなく、タンパク質や膜表面と相互作用しながら構造化されていると考えられています。

ポラック博士の理論は、この「構造化された水」が生命活動の基盤を支えているのではないかと、いう新たな視点を提示しているのです。

## 2. 創世記の水と光の描写との一致

ここで改めて創世記の記述を見てみましょう。そこには、「地は形なく、むなく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」とあり、混沌の中にまず「水」が存在していたことが示されています。

そして、神は最初に「光あれ」と宣言されました。科学的視点から見れば、この「光」は単なる可視光ではなく、広い意味でのエネルギーを象徴していると解釈できます。

神が水に光を注がれた瞬間、それは単なる物理的な明暗の始まりではなく、水に秩序と生命誕生の環境を整える出来事だったと読むことができるのです。

ポラック博士の「第四の水の相」によれば、水は光を受けて特別な構造を形成し、その場に秩序とエネルギーが生まれます。これはまさに、創世記の「光あれ」という宣言と一致しています。

神が光をもって水に働きかけられたことにより、生命の誕生に必要な基盤が準

備された——そう解釈できるのです。

### 3. 生命情報と生命エネルギーの場

さらに興味深いのは、この「第四の水の相」が「情報」と「エネルギー」という二つの側面を兼ね備えているように見える点です。

第一に、構造化された水は秩序を持つため、分子配列のパターンを通じて「情報」を保持する可能性が指摘されています。これを聖書的に解釈すれば、神が水の中に「生命情報を書き込むスペース」を備えられたと理解できます。

第二に、光によって「第四の水の相」は拡大し、電位差を生じさせることが観察されています。これは一種の「エネルギーチャージ」とも言えます。つまり、神が光を注ぐことで、水は生命を支えるエネルギーを満たす器となったのです。

このように考えると、創世記の冒頭部分は、単なる象徴的な物語ではなく、生命誕生の物理的・霊的条件を端的に示していると解釈することができます。

### 4. 科学と神学の対話としての意義

もちろん、ポラック博士の「第四の水の相」は、現時点では主流科学に完全に受け入れられているわけではありません。

ポラック博士はワシントン大学の正規の生命工学教授であり、その研究は査読誌に掲載されていますが、「EZ水」の生理的意義についてはいまだ議論の途上にあります。

再現性の確認や、細胞内での役割についての理論的裏付けは、今後の研究課題として残っています。

しかし一方で、この理論が生命と水の関係を生きたな角度から問い直すきっかけを与えていることも確かです。

聖書は古代の人々に与えられた啓示の書ですが、その中に込められた象徴や言葉は、現代科学の発見と不思議なほど呼応する場合があります。

光と水から始まる天地創造の物語と、光を受けて秩序を生み出す「第四の水の相」——この二つを重ね合わせることによって、私たちは「生命誕生の奥義」に一步近づくことができるのではないのでしょうか。

科学は実験と検証を通じて自然の仕組みを解明します。神学は啓示と信仰を通じて、創造主の意志を読み取ろうとします。

その二つが交差する地点に、創世記と「第四の水の相」をめぐる対話があります。それは決して科学を聖書に従属させるものでも、聖書を科学に矮小化するものでもなく、互いを照らし合わせてより深い理解に導くものです。

## 5. 第1回のまとめ

「光あれ」との神の言葉によって、水に秩序が与えられ、生命が生まれるための舞台が整えられた、これは神学的にも科学的にも、非常に豊かな解釈を可能にします。

ポラック博士の「第四の水の相」は、創世記の言葉に新たな意味を見出す手がかりとなります。そして逆に、創世記の啓示は、科学者たちが水の神秘を探究する上でのインスピレーションを与えるものとなり得ます。

天地創造の物語と現代科学の理論が、時を超えて互いに共鳴するとき、私たちは「生命とは何か」「創造とは何か」という根源的な問いに、より深い次元で近づいていくことができるのです。

## 第2回 水が生命環境を整える証し

私たちが地球上で生きていく上で、欠かせないものの一つが「水」です。

水は単なる液体にとどまらず、生命を支える情報とエネルギーの媒体であることが、現代科学の一部においても指摘され始めています。

アメリカ・ワシントン大学のジェラルド・ポラック博士が提唱する「第四の水の相」はその代表的な理論です。

この理論によれば、水は固体・液体・気体という三相に加えて、表面近傍で光を受けると秩序だった構造をつくり、電位差を生み出してエネルギーを蓄える特別な状態に移行します。

この「第四の水の相」は、生命の基盤を支える仕組みとして注目されています。

ここでは、砂漠における昼夜の温度差を一つの例として挙げ、水がいかに関与しているかを考えてみたいと思います。

### 1. 砂漠の極端な昼夜の温度差

砂漠は、昼間は灼熱、夜は極寒という極端な温度変化で知られています。その理由は主に以下の三点にあります。

#### ①水分が少ない

水は比熱が大きく、エネルギーを蓄える能力に優れています。湖や海のある地域では、水が昼の太陽光の熱を吸収し、夜にゆっくり放出するため、温度変化は緩やかになります。しかし、砂漠には水が少なく、その緩衝作用がありません。

#### ②湿度が低い

空気中の水蒸気は、赤外線を吸収して「温室効果」をもたらしますが、乾燥し

た砂漠では、夜に熱がそのまま宇宙空間に逃げてしまいます。

### ③雲が少ない

砂漠は晴天が多く、昼間は強烈な太陽光を受けますが、夜は雲がないため保温効果がなく、急激に冷え込みます。

つまり、砂漠の昼夜の温度差は「水がないこと」が直接的な原因なのです。

## 2. 水はエネルギーをチャージする

ここで注目すべきは、水が単なる「冷却材」ではなく、エネルギーを蓄え、放出する存在だという点です。

海や湖のある地域では、水が昼間に受けた太陽光の熱を内部に蓄え、夜にじわじわと放出します。その結果、周囲の気温は安定し、生命に適した環境が維持されます。

砂漠は、この「エネルギーチャージ機能」を持つ水が欠如しているため、昼夜の温度差が極端に激しくなってしまいます。

ポラック博士の「第四の水の相」の研究によれば、水は光を受けることで秩序ある構造を形成し、内部にエネルギーを蓄積します。

これは、地表や海洋に存在する水が、太陽光を「チャージ」していることの科学的裏付けと重なります。

## 3. 砂漠は「第四の水の相」が欠けた例

砂漠は、「第四の水の相」が実際にどのように働いているかを逆説的に示す例といえます。

水が存在する地域 → 光を受けて水がエネルギーを保持し、昼夜の温度差を和らげる。

水が存在しない地域（砂漠） → 光を蓄えることができず、夜になると急激に冷え込む。

つまり、砂漠は「水がエネルギーを記憶し、生命を守る働きがあること」を証明する自然の実験場です。

#### 4. 創世記との関連—光と水の相互作用

天地創造の最初に登場する「水」と「光」（創世記1章1～3節）。まさにこれが、ポラック博士が発見した「第四の水の相」の条件です。

光を受けて秩序を形成し、エネルギーをチャージする水。これは、神が創造の初めから生命の舞台を整えられたことの科学的証拠と解釈できます。

砂漠はその逆の例として、「水がなければ光を受けてもエネルギーを保持できず、生命が住みにくい環境になる」ことを教えています。

聖書において「荒野（砂漠）」は、しばしば試練と乾きの象徴として描かれています。

イスラエルの民は、エジプトを出た後、40年にわたって荒野をさまよいました。水を求めて叫んだその記憶は、旧約聖書の随所に刻まれています。

「水がなければ生命は維持できない」という科学的事実は、聖書が荒野を「死の陰の谷」（詩編23編4節）として描く感覚と、深いところで一致しています。

砂漠の過酷さは、単なる気候現象ではなく、「水と光の恵みから切り離された状態」の象徴として、聖書全体に流れるテーマとも重なるのです。

#### 5. 水が生命環境を整える証し

砂漠の極端な昼夜差は、水がいかに生命環境を整えているかを際立たせます。水はただの液体ではなく、光と相互作用して「秩序」と「エネルギー」を提供する媒体なのです。

「第四の水の相」は、聖書の創世記が語る「光あれ」の言葉と深く呼応し、神が創造の初めから水に特別な役割を与えられたことを示唆しています。

科学はまだその全貌を解明しきれませんが、砂漠の現象一つを見ても、水の存在がいかに生命に不可欠かが理解できます。

水が光を受けてエネルギーを保持し、生命の基盤を整える——これこそが創造の神秘なのです。

## 第3回 「第四の水の相」が生み出す生命環境

私たちが住む地球には、さまざまな気候の地域があります。海に近い沿岸部と、内陸の乾燥した地域とでは、同じ緯度でも気温の変動に大きな違いが見られます。

沿岸部は比較的温和で、四季の変化も緩やかです。これに対して内陸部は、昼夜や季節の気温差が極端で、人が生活するには厳しい環境になることも少なくありません。

この違いをもたらしている最大の要因が「水」の存在です。

そしてこの事実は、現代科学における「第四の水の相」の研究と一致しています。

さらには、聖書の創世記に記される「水と光」の関係を改めて読み直す視点も与えてくれるのです。

### 1. 沿岸部と内陸部の気候の違い

海に面した地域は「海洋性気候」と呼ばれ、気温が安定しています。

例えば日本列島では、太平洋や日本海に面した地域は、夏は比較的涼しく、冬も極端に寒くなることは少ない傾向があります。

一方、大陸の内陸部、たとえばモンゴルや中央アジアの草原地帯は「大陸性気候」となり、夏は40℃近い酷暑、冬は-30℃に達する厳寒となります。昼夜でも20℃以上の差が出ることも珍しくありません。

同じ太陽の光を浴びていながら、なぜこれほどの差が生まれるのでしょうか。その答えは「水の存在」にあります。

### 2. 水の比熱とエネルギー保持

水には他の物質に比べて極めて大きな比熱があります。比熱とは、ある物質を1℃上昇させるのに必要なエネルギー量を意味します。

比熱が大きい物質は、同じ熱を受けても温度が上がりにくく、逆に冷めにくいという性質を持ちます。

海や湖は、昼間に太陽光のエネルギーを大量に吸収しても、すぐには温度が上がりません。そして、そのエネルギーを夜間や冬の季節に少しずつ放出するため、周囲の気候は安定します。

内陸には、この「熱のバッファー」となる大量の水が存在しないため、気温が太陽の影響を直接受け、激しい変動を引き起こすのです。

### 3. 「第四の水の相」とエネルギーチャージ

ここでポラック博士の「第四の水の相」の理論が思い起こされます。

「第四の水の相」は、水が光を受けることで秩序あるゲル状の構造を形成し、電位差を生じてエネルギーを蓄える特別な状態です。

つまり水は、単に「熱をため込む物理的な存在」だけでなく、光のエネルギーを記憶し、電気的にも生命活動を支える働きを持つのです。

沿岸部や湖のある地域が安定した気候を保つのは、単に水の比熱の大きさによるだけではなく、光と水の相互作用が「秩序とエネルギーの場」をつくり出しているとも言えるでしょう。

### 4. 創世記に見る水と光の秩序

創世記の冒頭を見ると、天地創造の最初の舞台は「水」であり、そこに神が「光」を注がれました。これは、まさに「第四の水の相」が示す「水が光を受けて秩序をつくり、エネルギーを保持する」仕組みと一致します。

海や湖がある場所では、水が光を受けて秩序を保持し、その結果として生命の住める環境が安定します。

逆に、内陸部ではこの働きが欠け、気温の変動が極端になるのです。ここに、神が創造の初めに水を置かれた意味を垣間見ることができます。

## 5. 水が生命環境を整える証し

沿岸部と内陸部の気候差は、自然界が示す「水の役割」の一例です。

水は光を受けてエネルギーを蓄え、ゆっくりと解き放ちながら、生命が住みやすい安定した環境を作り出します。

これは偶然の産物ではなく、創造主が水に与えられた本来的な性質であると理解できます。

「第四の水の相」の研究は、聖書の言葉が示す「水と光から始まる秩序」を、科学的な言葉で説明し直す試みだと言えるでしょう。

聖書はすでに数千年前に「水と光」を創造の根源として描いていました。科学がその意味を徐々に追いつきながら解き明かしているのです。

水は神の創造の証しであり、生命を守る器です。湖や海が沿岸地域を温和な気候に保つことは、その一端を私たちに示してくれているのです。

## 第4回 森林と草原の温度調整

地球上の生態系は実に多様ですが、その根本にあるのは「水」と「光」の働きです。

森林と草原という二つの代表的な環境を比べると、同じ地域でも、気温の変化や湿度の安定性に大きな違いがあることが分かります。

森林は涼しく湿り気を帯び、昼夜の温度差が比較的小さいのに対して、草原は乾燥しやすく、昼間は高温になりやすい一方で、夜間は急激に冷え込むことがあります。

この違いの背後にある鍵もまた「水」です。そして、その性質は、ポラック博士の「第四の水の相」という理論とも深く重なり合っています。

### 1. 森林と草原の気候的な違い

森林は多くの樹木が生い茂り、その葉や幹に豊富な水分を含んでいます。また、木々は根から水を吸い上げ、葉から水蒸気を放出します。

このプロセスは「蒸散（じょうさん）」と呼ばれ、森林全体が一種の「巨大な加湿器」として機能しています。

そのため森林内部は湿度が高く、気温の変化が緩やかです。夏の昼間も直射日光が遮られ、気温は上がりにくく、夜も水蒸気や蓄えられた水分が放出されることで冷え込みを和らげます。

一方、草原には大規模な木々が存在せず、地表の水分保持力も弱いのが特徴です。

日中は太陽光が直接地面を照らし、水分が少ないために急激に温度が上昇します。夜間になると、保持できる水分が少ないため放射冷却が進み、急速に冷え込んでしまいます。

## 2. 水の比熱と温度調整の仕組み

このような森林と草原の違いを生み出す大きな要因は、水の比熱の大きさにあります。

水は他の物質に比べて多くの熱を蓄えることができるため、気温の極端な変化を和らげます。

森林の樹木に蓄えられた水分や、葉からの蒸散によって供給される水蒸気は、周囲の空気の温度を安定させる働きを持っています。

これに対して草原は水を蓄える力が弱く、結果として昼夜の温度差が激しくなるのです。

つまり森林が「生命を守る温度調整装置」となっているのは、水の存在が鍵になっているということです。

## 3. 「第四の水の相」との関わり

ここで思い出されるのが、ポラック博士の提唱する「第四の水の相」です。この理論によれば、水は光を受けることで秩序ある構造を形成し、電位差を生じてエネルギーを蓄えることができます。

森林は光と水の相互作用が豊かに行われる場です。葉の表面や細胞内の水分が光を受け、「第四の水の相」が形成されることにより、単なる「熱の保持」以上の役割を果たしている可能性があります。

秩序ある水の構造がエネルギーをチャージし、それをゆっくりと環境に解放することによって、森林の気候安定作用が支えられていると考えることができるのです。

草原は広大な日射を受けますが、水の絶対量が少ないため、光と水の相互作用による「エネルギーチャージ機能」が十分に働かず、結果として、極端な温度変化を生むのだと説明することができます。

## 4. 創世記の「地に緑の草木を生じさせた」

聖書の創世記 1 章 11 節には次のようにあります。

神はまた言われた、「地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ果樹とを地の上にはえさせよ」。そのようになった。（創世記 1 章 11 節・口語訳）

ここで描かれるのは、神が地にまず「草木」を生じさせられた場面です。草原と森林の違いはありますが、神が地に植物を与えられたこと自体が、気候の安定と生命維持のための条件を整える意味を持っていると読むことができます。

森林において、木々は水を保持し、蒸散を通して周囲の環境を潤しますが、これは単なる自然現象ではなく、「生命を守るために水を媒介として働く仕組み」と理解できます。

「第四の水の相」の視点を重ねれば、神が草木を与えられたのは、生命の場に「エネルギーと秩序の媒体」を設けられたことと解釈できるでしょう。

聖書の創世記 2 章 7 節には、「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた」とあります。

神が「息」をもって人に生命を与えられたこの場面は、空気と水蒸気が生命の媒体であることを示唆しているとも読めます。

森林が蒸散によって大気に水蒸気を供給し、気温を安定させ、生命が息づける環境をつくることは、神が「息」を通じて生命を育む摂理の自然界における反映と理解することができます。

## 5. 水が織りなす生命環境の調和

森林と草原の比較から見えてくるのは、水が生命環境を安定させる絶対的な要という事実です。

森林は水を豊かに蓄え、光を受けてエネルギーを保持し、周囲を涼しく守りまです。草原にはその機能が十分ではなく、環境は過酷になります。

この違いを通じて私たちは、神が創造の初めから水に「秩序をつくり、エネル

ギーを蓄える」使命を与えられたことを垣間見ることができます。

## 第5回 氷河と雪原の光の反射と保持

地球の極地や高山に広がる氷河や雪原は、私たちにとって過酷な環境であると同時に、地球全体の気候を安定させる重要な役割を果たしています。

そこに存在する「水」は、固体という形をとりながらも、光との不思議な相互作用を通じて、地球規模の調和を生み出しています。

この現象を科学的に見れば「反射率（アルベド）」の効果として理解できますが、ポラック博士の「第四の水の相」の観点を重ねると、氷や雪もまた「光を受けて秩序とエネルギーをつくる水の相」として新たに解釈できるのです。

そして、聖書の創世記が語る「光」と「水」の関係は、この自然の働きを数千年前から示唆していると考えられます。

### 1. 氷河と雪原のアルベド効果

雪や氷は白く輝き、太陽光を強く反射します。この反射率を「アルベド」と呼びます。

雪原のアルベドは0.8~0.9に達し、受けた光の大部分を宇宙に跳ね返します。これによって地球は過度に加熱されるのを防ぎ、気候の安定が保たれています。

一方、雪や氷が溶けて地表が露出するとアルベドは大きく低下し、太陽光を吸収して地中の温度が上昇します。

このように、氷河や雪原の存在は、地球の「温度調整装置」として極めて重要なのです。

近年、温暖化によって氷河や積雪が急速に失われ、アルベドが低下しています。

地表が露出するほど太陽熱の吸収が進み、さらなる温暖化を招くという「正のフィードバック」が生じています。

これは、「水（氷）が光を守る盾として機能している」ことの裏返しであり、その盾が失われつつあることへの深刻な警告です。

神が水に与えられた「光を制御する役割」が損なわれるとき、地球の秩序もまた乱れていくことを、この現象は示しています。

## 2. 雪と氷のエネルギー保持と緩衝作用

雪や氷は単に光を反射するだけではありません。融解する際に周囲から大量の熱を吸収する性質（融解熱）によって、急激な温度上昇を抑える「緩衝材」としても働きます。

春から夏にかけて氷河や雪が溶け出すには、膨大な熱エネルギーが必要です（融解熱）。この過程で周囲の熱を吸収するため、急激な温度上昇が抑えられます。

つまり雪と氷は、「光を反射して地球を守る鏡」であると同時に、「春の融解を通じて周囲の熱を吸収し、温度変化を和らげる緩衝材」でもあるのです。

## 3. 「第四の水の相」とのつながり

ここでポラック博士の「第四の水の相」との関係を考えてみましょう。

「第四の水の相」は、液体水が光を受けて秩序だった構造を形成し、エネルギーを蓄える状態を指します。

氷や雪は固体の相ですが、「水が光を受けて秩序をつくり、エネルギーを保持する」という点では、「第四の水の相」と同じ根本的な性質を示しています。

秩序：氷は水分子が六角形に結晶化した秩序構造を持つ。

エネルギー保持：氷や雪は融解熱という形で膨大なエネルギーを蓄える。

光との相互作用：雪原は光を反射することで気候を守り、また氷の内部には

光が散乱して独特の青さを生み出す。

このことから、氷河や雪原も「水と光がつくる秩序とエネルギーの媒体」として、「第四の水の相」の延長線上にある現象と考えることができます。

#### 4. 創世記に描かれる光と水

詩編 147 編 16～18 節にはこうあります。

主は雪を羊の毛のように降らせ、霜を灰のようにまかれる。主は氷をパンくずのように投げうたれる。だれがその寒さに耐えることができますでしょうか。主はみ言葉を下してこれを溶かし、その風を吹かせられると、もろもろの水は流れる。（詩編 147 編 16～18 節・口語訳）

この記述は、雪や氷が神の御手によって与えられ、やがて溶けて水となり、生命を潤す、その循環を描いています。まさに氷や雪が「秩序とエネルギーの保持」を担うことを示唆しています。

#### 5. 水が地球の温度を守る証し

氷河や雪原が存在することで、地球は過度に熱くも冷たくもならず、生命に適した温度を維持しています。これは偶然の産物ではなく、神が水に与えられた創造的役割であると理解することができます。

「第四の水の相」は、液体水における光と秩序の関係を示しました。氷や雪もまた、その延長線上にある「光と水の協力」によって、地球全体のバランスを整えているのです。

#### 6. 第5回のまとめ

氷河や雪原は、光を反射し、熱を保持し、季節の循環を通して水を供給するという多面的な働きを担っています。これはすべて「水が光と相互作用して生命環境を整える」という創造の原理の表れです。

「第四の水の相」の研究は、こうした現象の奥に潜む秩序とエネルギーの仕組

みを解き明かそうとしています。そして、聖書はすでに数千年前に、水と光の結びつきを天地創造の根本として記していました。

氷河や雪原を見つめるとき、私たちは、「水こそが神の創造の秩序を担う器である」という真理を、改めて知ることができるのです。

## 第6回 温泉と地熱水のエネルギー保持

人類は古来より、温泉に癒しや再生の力を見いだしてきました。日本でも、温泉は生活や文化に深く根つき、世界各地でも、地熱水は療養や祭祀の場として大切にされてきました。

科学的に見れば、温泉は地下の地熱によって加熱された水にすぎません。しかし、その働きをよく観察すると、水が「エネルギーを保持し、生命を潤す器」であることが浮かび上がってきます。

これはポラック博士の「第四の水の相」とも重なり、さらに聖書の創世記に描かれる「水と光の創造」のテーマと深く結びついています。

### 1. 地熱水と温泉の仕組み

地球内部は高温のマントルやマグマに覆われています。雨水や地下水が地中深くに浸透すると、地熱によって温められ、鉱物やガスを溶かし込みながら地表に湧き出します。これが温泉です。

温泉の温度は、地熱の強さや水の滞留時間によって異なり、ミネラルを豊富に含むことで独特の効能をもたらします。

硫黄泉や炭酸泉、塩化物泉など、泉質の違いは人々の健康に寄与するだけでなく、その土地の文化や信仰にも影響を与えてきました。

科学的に見れば、温泉は「地球の内部エネルギーを保持し、地表に供給するシステム」と言えます。

### 2. 水のエネルギー保持の性質

水は比熱が大きいため、熱を蓄える能力に優れています。地下にある水は長い時間をかけて地熱を吸収し、そのエネルギーを保持したまま地表に運び出されま

す。

温泉は単に「熱い水」ではなく、地球の奥深くのエネルギーを一度受け取り、それを保持しながら地表へ運ぶ生命の媒体なのです。

人々が温泉に浸かることで体が温まり、血行が促進されるのは、水が保持してきたエネルギーが人体へと移される過程だと言えます。

### 3. 「第四の水の相」との関連

ポラック博士の「第四の水の相」は、水が光を受けることで秩序だった構造を形成し、電位差を生み出してエネルギーを蓄えると説明します。

温泉や地熱水の場合、水は光ではなく地熱という形のエネルギーを受け取り、それを保持します。

もちろん、地熱による水のエネルギー保持は、光による「第四の水の相」の形成とは機序が異なります。

しかし、「水が外部から与えられたエネルギーを蓄え、生命に還元する」という大きな枠組みで見れば、両者に通底する原理を見いだすことができます。温泉は、その類比的な例として理解することができるでしょう。

光を受けた水 → 秩序を形成し、エネルギーを保持（「第四の水の相」）

地熱を受けた水 → 熱エネルギーを保持し、地表へ運搬（温泉・地熱水）

いずれも「水は外から与えられたエネルギーを貯蔵し、生命に供給する」という役割を果たしているのです。

### 4. 聖書に見る水と生命の源泉

創世記の2章10節にはこのようにあります。

また一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分れて四つの川となった。（創世記2章10節・口語訳）

エデンの園を潤す川の源泉は、地の奥深くから湧き出る水を連想させます。神

は地の奥から水を湧き出させ、それをもって園全体を潤されました。

この水は単なる飲用水ではなく、「生命を養う力」をもった霊的・物理的資源として描かれています。

温泉や地熱水もまた、地の奥から湧き出し、生命を潤す象徴です。そこには「神が水を通じて地と人をつなぐ」という普遍的な創造の原理を見ることができます。

さらには、詩編 104 編 10 節にもこのような聖句があります。

あなたは泉を谷にわき出させ、それを山々の間に流れさせ、（詩編 104 編 10 節・口語訳）

このような聖書の表現は、地表に湧き出る水が神の御業の一環であることを示しており、温泉や地熱水もその延長にあると理解できます。

## 5. 水が地球と生命をつなぐ働き

温泉は、地球内部のエネルギーを受け取った水が、地表で再び人間や生態系を潤すプロセスです。これは「水が地球と生命をつなぐ媒体である」という事実を端的に表しています。

「第四の水の相」が「光と水の相互作用」を通して生命の秩序を支えたとすれば、温泉や地熱水は、「地熱と水の相互作用」を通して生命を潤す仕組みを担っています。

異なる形ではありますが、いずれも「水は与えられたエネルギーを保持し、生命に分配する」という根源的な役割を果たしているのです。

## 6. 第6回のまとめ

温泉や地熱水は、単なる自然現象ではありません。それは「水が外から与えられたエネルギーを保持し、生命に供給する」という神の創造の仕組みを証しする存在です。

「第四の水の相」は、光と水の間係を解き明かしつつありますが、温泉や地熱水は、地熱と水の間係を通じて、その同じ原理を示しています。

また、創世記に描かれる「水と光」の間係は、温泉や地熱水を含むあらゆる自然現象の背後に流れる、普遍的な秩序を指し示しています。

温泉につかるとき、私たちは単に体を癒やしているだけではなく、創造主が水に込められた、神秘的な力に触れているのかもしれない。

## 第7回 自然現象にみる生命の秩序

聖書の創世記の冒頭には、天地創造の場面が描かれています。（創世記1章1～3節）そこに登場するのは「水」と「光」です。

これは単なる詩的表現ではなく、現代科学における新しい研究——ポラック博士が提唱した「第四の水の相」と一致しています。

「第四の水の相」とは、水が光を受けて秩序だった構造を形成し、エネルギーを蓄える特別な状態を指します。

水が生命の情報とエネルギーを保持する器であるというこの理論は、創世記に記される「光と水の相互作用」を科学的に読み直す鍵となり得ます。

本記事では、これまで見てきた五つの自然現象——砂漠、湖と内陸、森林と草原、氷河と雪原、温泉と地熱水——を振り返りつつ、水がいかにして神の創造の秩序を担っているかを総括します。

### 1. 砂漠—水のない環境の厳しさ

砂漠は昼夜の温度差が極端に激しい地域です。その理由は、水が存在しないために、昼間に受けた太陽の熱を蓄えることができず、夜は急激に冷えてしまうからです。

逆に言えば、水の存在こそが「昼のエネルギーを夜に伝える緩衝材」となり、生命に適した環境を整えているのです。

砂漠における昼夜の極端な温度差は、水のエネルギーチャージ機能の重要性を教えています。

### 2. 湖や海と内陸—水の比熱が生む温和な気候

沿岸部は気候が穏やかで、内陸は極端な気温変化を示します。この差の原因も

また水です。

海や湖は比熱が大きく、光エネルギーを受けても急激に温度を変えず、長い時間をかけて保持・放出します。

ポラック博士の「第四の水の相」の視点から見れば、水は光を受けて秩序を形成し、単なる熱の保持以上に「エネルギーをチャージする器」となっています。

沿岸部の安定した気候は、「第四の水の相」の働きを地球規模で示す証しといえるでしょう。

### 3. 森林と草原—水蒸気と蒸散の働き

森林は涼しく湿潤で、草原は乾燥して昼夜の温度差が激しい——この違いもまた、水が鍵を握っています。

森林は木々が水を蓄え、葉から蒸散によって水蒸気を大気に供給します。その結果、湿度と気温が安定し、生命に適した環境が維持されます。

光を受けた葉や細胞内の水は「第四の水の相」を形成し、秩序とエネルギーを保持します。

森林は「光と水の相互作用」が豊かに働く場であり、草原との差は水の量と質の違いを反映しています。

### 4. 氷河と雪原—光を反射し、熱を蓄える水

雪や氷は地球を守る「白い鏡」です。太陽光を反射するアルベド効果によって地球の温暖化を防ぎ、さらに内部に熱エネルギーを保持してゆっくりと解放します。

氷の結晶構造は高度な秩序を持ち、まさに「第四の水の相」の延長にある現象といえます。

秩序、エネルギー保持、光との相互作用——雪や氷は水が生命環境を調整するもう一つの形を示しています。

詩編 147 章 16 節から 18 節にはこのようにあります。

主は雪を羊の毛のように降らせ、霜を灰のようにまかれる。主は氷をパンくずのように投げうたれる。だれがその寒さに耐えることができましょうか。主はみ言葉を下してこれを溶かし、その風を吹かせられると、もろもろの水は流れる。（詩編 147 章 16～18 節・口語訳）

雪や氷は神が与えられた「生命の調整機構」なのです。

## 5. 温泉と地熱水—地球内部のエネルギーを運ぶ水

温泉は、地下に浸透した水が地熱によって温められ、再び地表に湧き出す現象です。そのように、水は地球内部のエネルギーを受け取り、それを保持したまま人間や自然界に供給します。

この現象は、光ではなく地熱を源とする点で異なりますが、「水が外部から与えられたエネルギーを保持し、生命に分配する」という点では、「第四の水の相」と同じ本質を示しています。

創世記の 2 章 10 節に「一つの川がエデンから流れ出て園を潤し」とあるように、地下から湧き出る水は、生命を支える神の仕組みの一部であり、温泉もその象徴的な姿と見ることができます。

### 総括—水と光に託された創造の秩序

五つの自然現象を振り返ると、共通しているのは「水が光（あるいは地熱）を受けてエネルギーを保持し、秩序を生み、生命環境を整える」ということです。

砂漠 → 水が欠けると生命環境は極端に過酷になる。

湖や海 → 水が光をチャージし、気候を安定させる。

森林 → 水が蒸散を通じて秩序と潤いを供給する。

氷河と雪原 → 水が秩序を保持し、光を反射して地球を守る。

温泉 → 水が地熱を保持し、生命に分配する。

これらはすべて、創世記が冒頭で強調する「水と光」のテーマを、自然現象の中で再確認させてくれるものです。

科学は今、水が示す神秘の一端を解き明かそうとしています。しかし、数千年前に記された聖書は、すでに「水が創造の根本に置かれ、光を受けて秩序を生み出す」という真理を語っていました。

そして、「第四の水の相」という理論は、聖書における「水と光」の啓示を科学的に照らす試みです。砂漠の過酷さも、湖や海の安定も、森林の潤いも、氷河の白さも、温泉の温もりも——すべては水が創造の秩序を担っている証しです。

創世記の言葉に立ち戻るとき、私たちは、水を単なる物質ではなく、「神が生命のために備えられたエネルギーと情報の器」として見ることができます。

イエスはサマリアの女にこう言われました。

わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。（ヨハネ4章14節・口語訳）

「第四の水の相」が示すように、水は秩序とエネルギーを保持し、生命を支えます。

しかし聖書は、物質としての水の先に、霊的な「命の水」を指し示しています。科学が水の神秘を解き明かすとき、それは同時に、霊的な渴きを潤す「生ける水」へと私たちを誘うのかもしれない。

水は光を受け、秩序をつくり、生命を守る。そこにこそ、天地創造の神秘と神の愛の働きが刻まれているのです。